

# 創刊 15 周年を祝して

担当者の思い出と意見

## 岡山畜産の歴史

岡山県酪農大学校校長 藏 知 毅

早いもので、「岡山畜産便り」が発行されてもう 15 年になる。私の手元にある創刊号からの畜産便りは、積重ねると相当な高さになる。私の収集癖から創刊号から現在まで 15 巻、150 冊が全部揃っている。これも私の自慢の 1 つであるが、自分で手掛けて来たこの愛誌 1 冊 1 冊に限りない愛着を感じる。この 150 冊はさながら戦後の岡山畜産の歴史であり、貴重な資料である。現在私はこの 1 冊々々を開いて、重な出来事を整理しているが、貴重な文献になってしまった。この畜産便りの編集で時の担当者は皆それぞれ苦勞をして、この雑誌を生み出したのであるが、その苦勞は並大抵のものではなかった。

戦後多くの県でこの種の機関誌を発行したが、生れたり、消えたりして、15 年も続いているものは 1 ～ 2 しかないと記憶している。続けることのむつかしさをまざまざと見せつけられるのである。

お手元の古いものを持ち出して、自分の活字になった文章を読み返して、全く汗顔の至りである。当時は編集者に督促されたり、穴うめに字数を限られて書かされたので、相当無理なものも見受けられるが、集めれば相当な枚数になる。特に連載したニュージーランドの印象などは、今日出して見ても、今回のよい参考になるもので、矢張り書残しておくべきであると思うのである。これなどは極めれば 1 冊の単行本ができる程である。

それにつけても思うのは、惣津前課長の巻頭言である。第 1 号は佐藤剛知事、第 2 号は本城経済部長で、第 3 号になって初めて惣津前課長の年頭偶感が出て来るが、それ以来実に 10 年間、毎号のあらゆる面に亘って、時の流れと共にその話題を筆に乗せ、或いは教え、或いは布望を述べ、或いは激励し、或いは決意を述べて、畜産の同志に訴え、先頭に立って畜産の発展に努力されたのである。この巻頭言を纏めてみれば、これも立派な単行本ができ、岡山畜産史の戦後編が出来るであろう。それ程 10 年の歴史

は永いのである。この間畜産便りの発行は読者の購読料と広告料でまかない、大半は無料で配布したのであるから、経営は決して楽ではなかった。御協力を頂いた数多くの寄稿者、広告主に対して改めて厚く御礼を申し上げたいと思う。

それにしても原稿料を一文も払わず、よくこれだけの原稿が集ったと思う。これも寄稿者の御理解があったからで、今更乍驚く他はない。黙々として編集に当たってくれた、多田昌男、片山秋坪の両君を始め、時々編集者にも感謝する次第である。

畜産便りは発行部数が少いわりによく読まれている。農林省でも評判は良いし、各県を廻ってみると送付の希望者が多い。各県でも岡山県の畜産に注目している証拠である。この点からも継続発行を望んで止まない。

最近畜産の専門誌は随分沢山出ているし、内容もよくなって来た。畜産便りは専門誌ではないが、これ等の畜産誌と同じ様に講読者を持っているのである。となれば読者の希望する様な独自の編集を続けなければならない。そこに編集者の苦勞もあるわけである。これ等の畜産誌に負けない優良なものに持っていきたいものである。

畜産便りも本年 1 月からおかやま総合畜産と合併して、統合版を出すようになり、既に 9 号まで発行された。発行所も岡山県畜産会に遷った。然し畜産会長は本誌と最も縁の深い惣津さんである。惣津さんの手に遷った本誌は更に躍進することであろうし、私達もそれを願って止まない。希望を許されるならば、現在のトップ記事「人と意見」も洵に結構であるが、私は惣津会長の一貫した巻頭言の様なものがほしいように思うし、先月の畜産界のニュース、行事の様なものを 1 ページ位にダイゼストして入れて頂きたい。本誌そのものが岡山畜産の歴史であってみれば、1 ページ位は記録として残してほしいものである。過去を知ること、将来への発展に必要で

## 岡山畜産便り 1964.10・11

あることを認識して頂きたいものである。  
ともあれ、15年の歴史は更にこれからの15年、20

年に続くものである。本県の畜産の歩みと共に、永く継続発行されることを祈って止まない。

# 青少年農業者の土根性を期待

勝山農林事務所畜産係長 長江 勘次郎

△岡山畜産便りが初声をあげて15年という。実は、はづかしいことであるが全然知らなかった。15年前といえば、戦後復興の兆が漸く現われ、畜産が再認識され時代の脚光を浴びてきたいわゆる畜産の黎明期というべき頃となる。創刊15年、このことは取りも直さず、畜産便りが岡山県の畜産とともに歩み、そして歴史を刻み、そして偉大な歴史を作ったものといってよい。御同慶という外はない。

△僅かな期間であったが編集に関与した1人として、毎号送られてくる畜産便りを手にして当時を回想し、なつかしきをおぼえると同時に誠に感慨深いものがある。編集のむづかしいこと、原稿集めに苦労したこと、1ヵ月分を発刊してほっとした束の間また次号の編集に取り組まなければならない追っかけごっこの連続であったこと。掲載予定の原稿が届かずあわてたこと。思い出は過去の遺物である。思い出はつきない走馬灯の如くに。

△印象の1つに歴代畜産課長達の巻頭言の健筆である。殆んど休むことなく毎号に寄稿されていた話題提供や農政時局問題など異彩を放っている。巻頭言だけ集めて1冊の本にしたならばどうであろうか。温故知新、岡山県の畜産の歴史を物語る面白い読物となるのではないか。

△原稿集めに苦労したことを思い、何度か投稿しよう、投稿しなければならぬと自分にいい聞かせていたが、身の雑事に追われてという得て勝手な理屈をつけて御無礼している。いざ記事を書こうとするとなかなか筆が運ばないものだ。書くということのいかにむづかしいことか。この15周年の祝しての記事も苦労している。不勉強を今更ながら残念に思う。こういう意味からも、巻頭言をはじめ、投稿の皆様は改めて敬意を表したい。

△「洛陽の紙価を高める」という言葉がある。県や団体の職員が編集し発刊されている極く専門的な月

刊雑誌が、かくも長く続いているということが不思議といえば不思議な位だ。というのは他の多くの県などの畜産便り類似の刊行物が泡沫の如く立ち消えて行く現状を見ると、殊更思うことである。全国でも余り例がないのではなからうか。

△最近農業に新しい言葉が盛んに飛び出してきている。例えば、農業構造改善、農業生産の選択的拡大、主産地形成、集団産地の育成、営農類型の設定、農業の協業、農地信託、請負耕作、開放経済体制への移行、食品工業コンビナート、父子契約農業、アグリビジネス、農業体質改善、農業コンサルタントなどである。ちょっとした新しい熟語なり言葉を使わないと、何もこと新しく事業を行っていないようにも錯覚を起す今日今頃である。新しい言葉を考え出して新鮮味ある雰囲気醸し出して、農業行政をうまく推進しようとする腹であろうが、肝心の最もよく理解してもらわねばならない農業者が果して何人理解しているだろうかと疑問を抱くことがしばしばである。農政の標語に解りにくいことが多いが、もう少しくだいた平易なよい言葉はないものか。ないとなれば農業者に一段と理解せしめるように、畜産行政の流れを汲む畜産便りの使命感に期待と信頼を寄せるものである。

△人間の思想というか思考に2通りある。簡単にいえば物的ということと、精神的ということである。東京オリンピック開催を機に根性という言葉に耳にする。多少ニュアンスは違っても土性骨という言葉もある。

真庭郡内の農業構造改善に取り組んでいるある村で聞いたことであるが、50、60才前後の百姓が、「今俺達の手で構造改善をして置かなければこれからの若い者は今後ようやりゃせん」と。この村の農業という職業に就いている経験者には農業に対する敗北感は微塵にもない。農業者の根性躍如たるものがある。

## 岡山畜産便り 1964.10・11

る。現在ほど青少年達、農業従事者に根性を期待しているときはないと思う。ところが新学校教育法によって教育された者は直ぐ物事を物的に考えて行く。悪いとはいわないが、一度就職してもちょっと気に入らなければ、直ぐ尻と割るという傾向があるときく。青少年が農業に従事しないというのは、農業に魅力がないということだけでは割り切れないある種のものが欠けているような気もする。畜産便りに時々見受ける脚下照顧は或る人のペンネームであるが、禪宗からきていると記憶している。ペンネームがいみじくも教える。脚下照顧、それは根性である。△内的或は外的作用によって激しく強く地すべりの

現象を起している今日の農業及び農村から、農業未来像を建設することは容易な業でない。こうあって欲しい姿、こうなるであろう姿、こうでなければならぬ農業と農村の姿はある筈である。国家的にも、地域社会的にも、個人的にも未来像を画いてそれに向って進んで行っている。農業軽視の風潮の中にあつて、畜産の持つ特殊性から、未来像に果たす役割は大きいものと確信する。今後も岡山畜産便りが1つの防波堤となつて、明るい農村建設の糧となることを期待するものである。

岡山畜産便りが益々発展することを冀うものである。

# 6年間の担当時代を顧みて

県普及教育課専技 多田昌男

岡山畜産便り創刊15周年を迎え、ますます発展途上にありますこと、心からお喜び申し上げます。

かえりみますと昭和24年秋、惣津岡山県畜産会長さんを本県畜産課長としてお迎えし、同氏を発行責任者として岡山畜産便りが発行される運びになり、当時畜産技術と県行政を一般に広くお知らせする唯一の畜産雑誌として、畜産技術者をはじめ一般農家に親しまれていました。翌25年5月県畜産課へ奉職しました私は、その後31年5月まで満6年間に、岡山畜産便りの直接編集業務に従事させて頂きました。その間大過なくすごさせて頂きましたことは、先輩諸氏並びに愛読者各位の御指導御鞭撻によるものと深く感謝いたしております。

その後多くの方々によって引継がれ今日に至りましたが、内容は日々充実し、本年はじめからは畜産会で発行されることになり、創刊者である惣津会長さんが再び発行者となられましたことは誠によろこばしい限りであります。県から一方的な伝達のみでなく、広く畜産各界からの声が載せられ、より一層大衆化されましたことは読者各位の親しみを増すことと思ひます。

1冊の本を毎月発行することは並大抵の努力ではできません。発行者をはじめ編集担当者は毎日々々本務の片手間に原稿の依頼、整理、編集、校正で

追われ、やっと発行が終った喜びも束の間で、印刷代金に追われる始末でした。未納会費の徴収と畜産関係業者の方々に無理な広告を依頼して、赤字を補填するのが私の過去の実状でしたが、6年間の編集業務から開放され酪農試験場へ転勤を命ぜられました節は、へたくソな文章から逃れることができ、頭をかくことは易く、字を書くことが如何にむづかしいかを知らされました。

今日その当時とはうって変り装を新らたに、立派な畜産広報誌として15周年を迎え、次代の畜産指針としての役割はますます重且つ大と思ひます。先輩諸氏の御指導により微力ながら編集に参加させて頂き、畜産人の一員としまして御祝を申し上げる機会を頂きましたこと厚く御礼申し上げますと共に、今後「岡山畜産便り」の一層の御発展をお祈り申し上げます。

## 幅広く畜産人の友としての発展を祈る

県和牛試験場長 林 正 夫

「岡山畜産便り」が創刊15周年を迎え、なお、将来に向けて大きく発展する姿勢にある。よくぞ立派に育ったものと感にたえない。創刊当時からこれを手がけて来たかたがたのご苦勞に対して頭が下がる。

畜産と果樹とは農業の選択的拡大部門の双壁として、誰しも異論をさしはさむ者はない。けれども、畜産は今のところ、安定した軌道の上を走る段階に到達しないうちに、開放経済下にさらされようとして苦悩していると言った姿ではなかろうか。多くの輸入飼料に依存した形で発達する畜産には大きな問題がある。畜産物価格にしても農産物中、国際競争力の弱いのが畜産物であると指摘されている現実から脱却しなければならない。地に根を下ろした、真に第1次産業としての畜産の発達が望まれるわけである。

さて、私の今の職域から、思いつくままを述べて見たい。

農業構造改善事業の中に畜産物を基幹作物とするものが多い。しかし、将来に対して全幅の信頼をおいているであろうか。価格の裏付けが確約されなければという心配は誰もがもっていると思う。家畜なり畜産物の消費流通の現状は、農産物の中でおけているものの最右翼であろう。今や急速度で政治行政がこれと取り組んでいる。私達は行政を推進するための裏付けとなるように、畜産物の処理加工貯蔵などの分野に研究を進めなければならないわけである。しかし、これらの分野は直接行政に委ねて、当面は生産費を節減することに問題をしばり、生産過程における技術的な分野の開拓に能力を傾け尽すのが正しい姿であると考えている。

そこで、最近和牛——肉用牛と言ったほうが適切か——についての試験研究課題の決定に当り、次の3つのことを柱と考えている。

その1つは、和牛経営は企業化し難く、単位当り生産性も低いとされているので、他の作物を生産できない低位生産性の土地条件に立脚して、労働粗放

的に、なお設備投資を極力切りつめるという観点から、省力多頭飼育のための設備なり技術なりを究明しようとしていることである。

つぎは、産肉能力の高い経済形質のすぐれたものに、和牛を改良しようという観点から、育種の面から、種雄牛の畜肉能力の検定方法の確立を急いで、効率の高い改良に役立てなければならないことである。

もう1つは、中国地域の和牛について重要課題と思われる子牛生産経営を、どのような土地基盤の上で、どのような規模と飼養型態——単一か複合か——で、どのような技術を用いて、行うべきかを体系づけることが要望されていると思っている。

たいへん固苦しいことを書いてしまったようであるが、このような考えに立って、和牛経営を近代化するために、緑の下の力持ちをすることができれば幸いである。

おわりに、この「岡山畜産便り」が、以前は畜産情報の上から下への一方的な指導の場という感じが深かったように、私は感じていたが、このごろは、読者共通の広場として、いろいろな角度から幅広く原稿が集められているようで、かねがね私の願っていた方向へ編集子の努力が払われているようで、わが意を得たように感じている。今後なお一層親しみ易い読物として発展するよう、健康優良児のスクスク伸びることを期待して拙稿を閉じる。

## 数ある農業雑誌の中で

幸 府 倂

書店で手にする農業関係の雑誌は10冊近くもあり、この他にしまわっているものを数えれば14、15冊にもなろう。

意欲的な農家の方々は、そのうちのどれかに目をとおしている筈である。私がお近づき頂いている T さんは酪農家であるが、畜舎の片隅の机にデーリーマン、酪農事情、地上、畜産の研究が無雑作におかれている。

そしてその雑誌の記事について意見を求められることがしばしばある。家の光が平凡と肩をならべてベストセラーになっているのは周知のところである。

県内畜産農業のよきコンサルタントとしてデビューしている本誌「畜産便り」もかように雑誌がハンランする中でよりよきコンサルタントになっているかどうかいささか疑問の感がある。

まして聞くとところによると、台所は火の車ということである。従って執筆者に原稿料が出せぬのは理解できないでもない。

原稿料を出さないで失礼とならぬ範囲の連中が投稿者に限定されるのはこれ又理の当然であろう。従って書く連中は固定し、失礼ながらその記事は身近かのコンサルタントにふさわしからざるものになってしまうのがオチである。鶏と卵の関係でもないが講読者が増えないのもわかる気がする。畜産便りが靴の底から足の裏をかくが如きものでないよう、編集者は配慮すべきである。

それにしても、農業団体が本誌の発刊に積極的に援助をし、肌でふれあうほどのコンサントぶりが発揮できるように出来ないものか。

生産資材と生産物を農協精神とかいう名言で包み、そのマージンでホワイトカラーぶりを発揮するのは、この世の機構ではあたりまえなのかもしれないが、土を忘れすぎているようだ。

農民に心の糧、土の糧を培うサービスを忘れないで欲しいものである。

私は教師であるが、学生に「明日にかけろ」と教訓(?)をたれている。

明日にかけろの仕事に今少し思いをよせてほしいものだ。

それにつけ思い出される一片の記憶がある。今から13年前、筆者が蒜山に住居した時の事である。当時畜産便りは、県庁内の畜産研究会が発刊していた。畜産課長は毎月の巻頭言に筆をとることになっていた。この巻頭言をたのしみに読み続ける農民がいたという事である。

多くを語る必要はあるまい。本県の農業が畜産が何処に行くのか、それが如何なる形でか、それに我々はどう対処すべきか、という思考と判然に活用していたわけである。

この農民は村議会議員であり農林関係の委員であったのである。かつての本誌は、かかる存在価値或は利用価値をもつことによって存在の合理性があったようである。

心すべきことであるまいか。農村に雑誌は氾濫しているのである。